



俳諧故人續五百題



一具庵大人撰

俳諧故人續五百題

江戸書林

萬笈堂  
桂林堂

人心不同猶如其面作俳  
句者亦復自南狹我所好  
以譏彼彼亦狹其所好以  
笑我至仇讐相視者非惑  
之甚乎予晚年慕蕙翁遊  
于松窓之間雖未入世

室、當雪工、夫殆費、數年  
暇、可涉獵諸抄、括披、以為  
一冊矣、聊以付尚友、以義  
近、日書肆某、乞持以行也、  
予謂、此集、百時、隨聞見而  
錄之、初無示人之意、取捨  
或、未盡其公也、雖然、寒鄉  
僻地、晚生、乏資者、置之於  
八、上、則、江山、風月、自在、其  
中、亦、不、為、無、聊、矣、松、窓、嘗  
曰、古、人、所、好、一、異、其、身、  
裁、苟、能、蒐、羅、則、可、為、大、富

也然則此冊雖小安知

其楷樣哉

中文政己丑春正月

八上陳一具庵一具



執此世之十方空置三書



百様のらしむにたうあるこゝあはしと

ふふくくをいして大慶高様と

かすうおくくもものすくなく短

句もてあそふもさくくくくくく

けりいふもかーくけりとい昇平鼓腹

の御代めくくくくくくくくくく

中にも帳臺のく化の文漁村が雪

此あけにれ舞をいひていへいへ毎にうら  
たしきとていへいへぬ人かんとけりける  
志りにあはしと風雅の二字は眼とありて  
いへいへれぬあまさらうよこころをいへ  
いへおもひにまはらういへいへいへ  
一具菴三上いへいへいへいへいへいへ  
とろいへいへいへいへいへいへいへ

をやいへいへいへいへいへいへいへ  
志衰子らめおきいへいへいへいへいへ  
七家事事いへいへいへいへいへいへ  
まうあふららうよとていへいへいへいへ  
いへいへいへいへいへいへいへいへいへ  
いへいへいへいへいへいへいへいへいへ  
いへいへいへいへいへいへいへいへいへ



かみ餅 八  
若水 八  
年玉 九  
守りごと 九

水いしと 九  
植物之部  
七種 九  
なつめ 十

子の目 九  
小松引 九  
芥 十  
梅 十

まはせ 十  
あま菜 十  
芥 十  
梅 十

折 十  
ととろ 十  
下崩 十  
若菜 十

核 十  
あまめ 十  
木のめ 十  
つる緑 十

落の塔 十  
せきとら 十  
らぎぎ 十  
すみれ 十

ふんち 十  
いどじ 十  
あぎみ 十  
木瓜 十

芦角 十  
接木 十  
ろど 十  
茶漬 十

栗の冬 十  
種おや 十  
桃 十  
海棠 十

連翹 十  
梨の花 十  
杏 十  
あや 十

木蓮花 十九  
草むき 十九  
苗代 十九  
つるば 二十

麦 二十  
山吹 二十  
はじ 二十

生類の部  
おこの虫 二十  
白魚 二十  
あまの果 二十

雀子 二十  
百子鳥 二十  
雉子 二十  
あまの果 二十

帰雁 十九  
乙鳥 十九  
駒鳥 十九  
らぎ 十九

麦藁 十九  
條 十九  
蟲 十九  
蜂 十九

蛭 十九  
蛙 十九  
田螺 十九  
蟹 十九

名物 十九  
飯鮓 十九  
落角 十九

時候之部  
ききり 十九

佐保姫 十九  
ゆり 十九  
ききり 十九  
泳生 十九

左義長 十九  
霞 十九  
おろし 十九  
巾 十九

蕨入	三	餘寒	三	河かゝる	三	院野	三
雪間	三	残雪	三	東風	三	春風	三
雪解	三	春の海	三	春の月	三	春の日	三
春の夜	三	春の海	三	水ぬるむ	三	海雲	三
春乃野	三	寒の食	三	草餅	三	陽冷	三
海苔	三	寒の食	三	初午	三	彼岸	三
糸ゆふ	三	二日灸	三	西行忌	三	永き日	三
侍忌	三	飯槃	三	鶏台	三	汐下	三
出代	三	雛	三	畑うち	三	長閑	三
馬刀	三	曲水	三	行春	三		
りくれ霜	三	峯入	三				
通計百五十二題							

古人續五百題 夏之部 發句集 夏之部 目錄

4 頌の部							
ほととぎす	三	初丁	三	老翁	三	老翁を入	三
よき雀	三	翡翠	三	羽ぬけ	三	鴉	三
水鶏	四	あし	四	水鳥の巢	四	あし	四
かきあり	五	羽蟻	五	あまのり	六	蟻	六
ぞらあり	六	虫	六	蠅	六	夏の虫	六
蚊	七	蚊	七	蚊	七	蝸牛	七
蟬	八	空蟬	八	栗の子	八		
時候之部							



更夜	八	あひせ	九	青簾	九	突お	十
ほつこ	十	卵	十	華七日	十	あまの月	十
夏菘	十一	夏一言	十一	涯佛	十一	花浄堂	十一
新茶	十二	茶糺	十二	風呂	十二	みどり夜	十二
麦秋	十三	小角豆	十三	かのを	十三	鮎	十三
蛸	十三	のぼり	十三	粽	十三	豆蒲湯	十四
印地うち	十四	競馬	十四	竹酔日	十四	五九月雨	十五
入梅	十五	虎々雨	十五	あまの雨	十六	夏の日	十六
夏の日	十六	夏野	十六	夏山	十六	火串	十六
築らち	十七	田植	十七	早乙女	十七	早苗	十七
青田	十八	田草糸	十八	あまのぎ	十八	らちハ	十八
帯帳	十九	唯子	十九	砥園寺	十九	氷室	十九

雲の嶺	十九	あひせ	十九	昼森	二十	土用	二十
虫ぐし	二十	あひせ	二十	夕立	廿一	簞	廿二
牛ぬく	廿二	ととみ	廿二	風の向	廿三	うち水	廿三
ととみ	廿四	ととみ	廿四	沖鱈	廿四	清多	廿四
さし井	廿五	行ぬら	廿五	夏瘦	廿五	川狩	廿五
秋近	廿五	ふ二清	廿五	伊後	廿六		
植りの部							
郊の糸	廿六	名古糸	廿六	若楓	廿七	糸糺	廿七
夏はら	廿七	あひせ	廿七	夏木立	廿七	下園	廿八
青嵐	廿八	夏木立	廿八	桐の糸	廿八	いね袖	廿八
夏柳	廿八	まき	廿九	柳	廿九	栗の糸	廿九
合歡の糸	廿九	夏後盆子	廿九	あまの糸	廿九	母の糸	三十

百日紅	三十一	燕子花	三十一	ぼたん	三十一	芍薬	三十一
葵	三十一	苔のつぼ	三十一	いし	三十一	荊	三十一
竹の子	三十一	ゆき	三十一	茄子	三十一	あき	三十一
紅牡丹	三十一	夏菜	三十一	櫻子	三十一	百合	三十一
たらこ	三十一	豆うぼ	三十一	藻の糸	三十一	檨麻	三十一
紫陽花	三十一	萱草	三十一	ゆやめ	三十一	夕ぐほ	三十一
萍	三十一	河骨	三十一	蓴菜	三十一	蓮	三十一
蓮葉	三十一	おひら	三十一	蘭の糸	三十一	あ疏刈	三十一
若竹	三十一	林檎	三十一				

都心 百五十二題

古人續五百題發句集

春之部

あともうつくしきひたてよ花の雨  
 おれゆくともうと花の芳きま  
 花をよめる山風やこしはくみ  
 武蔵野やはより出てまき花の酒  
 目うつりや花よしせくるも山  
 花はつり山を日と海の朝ほけ  
 ちねとくもあのとあそる童お  
 花さうりうらみやこの酒をうれ

負徳  
 負室  
 季吟  
 宗因  
 鬼貫  
 芭蕉  
 立圃  
 守也

花

花さうりつ子てあつらへくまはる  
と好ふよふに重よなふし家様  
あつらふあにしくと花えか  
ううくとまてふあえの苗さ  
花さいて死ともあいう病ひう那  
ち好ふ一たぬるや葛城しうまら  
河津あや西行房りち好ふうせ  
首出して圃の花えよあつらひと  
ふふまてあそふ日あしてち那え  
花あつらひれて夢よりあふ死ん  
大佛らうふ花のけうりこの系  
栲の装束あひとち直とや花の中

其角 嵐雪 去来 末山 正式 言水 荷兮 野坡 越人 路通 北枝

昆布知くや花の氣のけくうの  
酒部やゆ琴の音せよ窓の花  
大峯やゆし母の奥に花のそ  
山やち好頃根くの酒もや  
めつじや内く花見の初や  
朝をのの湯を尻膝や庭の花  
あつらひや花えうりの物  
兄事のあつらひあけたり花の時  
教るをさるる酒ぬとくよ  
花瘡のちとまことゆるる  
葉喰ふあひをさるる花あ  
常秋ふとるまてちあつらひ鳥

利牛 惟然 曾良 亀洞 杉風 孤屋 野上 荒弾 舟泉 傘下 介我 千那

あふけらる風車賣る花のつき  
をよの山とこととてあふらん

薄芝  
晨風

櫻

鶴の巢ふ嵐の外はさくららのな  
ふとあふも様さし物をつくひ式  
様ねとせうろくことあるひとり式  
を鞆ふひこれやとる海山はくら  
かけあふく降出まれば様か  
麓寺かくまぬりのふささるの菊  
殿と特の妾様らる様茶を

芭蕉  
其角  
秋風  
如泉  
支考  
李風  
嵐雪

足ぬとをさくらりまうる菴二  
一枝のなをらぬもつろ山はくら  
あつつまふ奥やまを様こり  
雞の声もまきゆるやまをくら  
屋形ふ様上町の様ちりむけ  
考の端は崩まきく入るや山様  
食の所えれあつまるやや戸伝く  
様えとくゆあふりくるを食う  
とらきりと有明のこは様こり那  
葛藟の石物とらん山をくら  
筆ふこり墨染ぬかとはくら  
ぬらりもさる茶てんよ様こり

杜園  
尚白  
利牛  
凡兆  
杉風  
丈草  
野地  
梅舌  
荷兮  
李里  
徳元  
重頼

# 初櫻

素勅せよ方野もたてふ江戸櫻  
 沙汰座のどころくあり伊勢櫻  
 温石のめり梅夜まやもはくら  
 七夕ふ契あきそしそ川をく良  
 小僧あまより上野谷中の初櫻  
 教ふ似ねはるるも出よ初さら  
 ち門様え物のうらさあそん  
 供ふれもよりふこそよきそ川櫻  
 人の氣もかく窺わし初さら  
 赤産や木よりと変はるる櫻  
 頬白の鈴ふるかきよ初九久良

素堂  
 宗因  
 露沾  
 鬼貫  
 素堂  
 芭蕉  
 其角  
 去来  
 沾然  
 沾荷  
 圍指

# 八重櫻

奈良七重七堂伽藍八重櫻  
 花垣や雲も和光の八重さらら  
 宗てははらけへはきくん八重櫻  
 八重櫻京も移る奈良榮れ  
 又してと道七重の縁を八重櫻

芭蕉  
 鬼貫  
 吉保  
 沾圃  
 幸和

# 遅櫻

万日の人けちりともや遅きくら  
 さく花やこしの下まなほ遅櫻  
 誰母そ母に遅教るあそささ良  
 紙屑やとこころくよあそ傳えら  
 はうねまもまもやとこころ遅櫻

其角  
 鬼貫  
 祐甫  
 柴平  
 常久

元日

としの日

元日やおりの入るまひー秋のう  
 元日や月まね人のほーの音  
 元日や海く<sup>瀬</sup>くく<sup>瀬</sup>の石  
 元日や土<sup>瀬</sup>はう<sup>瀬</sup>は<sup>瀬</sup>もせき  
 元日も旅人をえる 驛う南  
 元日と明とぬーたる 霞う船  
 元日の木おの間の競馬足ゆるし  
 元日や夜ふるき衣のうら表  
 元日やまご<sup>瀬</sup>にるうは梅のう好  
 梅う香の筋ふるまよる初日うれ  
 亀の脊ふ海老ほのめじ初日山

芭蕉  
 其角  
 虎雪  
 去来  
 治徳  
 一笑  
 重五  
 千川  
 猿雖  
 支考  
 鬼貫

初雲

新玉

着衣始

濡りうや大ううけの湯日かけ  
 朝紅や水うくし初かきみ  
 枇杷のふおはるたうう初霞  
 けう玉の馬もあふり<sup>け</sup>と<sup>け</sup>い<sup>け</sup>あ  
 鳥の愛西あふ玉の年とらうる  
 あふ<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>う<sup>け</sup>あ<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>う<sup>け</sup>る春日<sup>け</sup>  
 愛あめりてきし<sup>け</sup>の綿やまきと始  
 母うこの紋う<sup>け</sup>じや<sup>け</sup>あ<sup>け</sup>衣と<sup>け</sup>め  
 初う<sup>け</sup>う<sup>け</sup>う<sup>け</sup>墨の袖ま<sup>け</sup>と<sup>け</sup>け<sup>け</sup>

任行  
 鬼貫  
 斜嶺  
 嵐雪  
 鬼<sup>貫</sup>  
 貞室  
 宗因  
 山峯  
 じく

初夢

けのまや額ふあはは扇子  
ゆえ明て浪のりうねや泊瀬寺  
秘ゆりや濱名の橋は今のま  
らん夢のよきふとやとて日

其角  
嵐雪  
越人  
隈光

こよみ

下りゆふみし生のこよみうね  
伊勢磨みちれおくすてふれり

徳元  
幽山

まゑ

らんらんや新年ふくるま五弁  
春まや星の中うら松の色  
年とまゑとらん天の戸やあしあを

芭蕉  
鬼貫  
正式

今朝  
の春

傘ハたさるかみとのと朝のいろ  
我々式う宿あもらんやけさたま  
今朝の春ま孫も有彦も有掬を返  
刀さる供もつとてしりさのいろは  
伊勢浦やお木引体む今朝のま  
けさのま海ははとありまのつら  
袖とりて松の葉繋るらんおれを  
らんはの春寂しからさる閑の那  
佛より神をたふときけさの春

皆山  
貞室  
嵐雪  
正秀  
龜洞  
西桐  
梅言  
冬松  
とん

花の  
ま

二日あもぬりのせしな花のま  
稀な年や日もうえけのむの日

芭蕉  
李吟

康代  
の事

おりのろやびハ初代のをねた  
まうの糸の多いところをのよ  
ふれ人の手かきもめじをねま  
五十あて四谷をこころ糸のこる  
窠形てふ連一いあてもねたま  
背しらおりのをこせとや糸のこる

宗因  
惟然  
古梵  
嵐雪  
去来  
野童

福寿科

昌陸の松とんはきね御代のま  
治とるの氣やアんとと門こよの春  
福寿科一寸ののけいをえなり  
く壽草やハ明この梅は春

利重  
正式  
言水  
高凡

法慶

新嘉の海菜ハふりれ三つをふハ  
長松ハ製の名をてまははとまハ

宗因  
野波

門松

門松やうし海もわらハ武庫の山  
らる門の松をてめとさうり玉を  
門まうもかきゆかきせねあこび  
まう門や二らんめとる門の松  
門ハ松ガ葉園の雪寒し

鬼貫  
宗因  
正式  
徳元  
舟泉

うら

山柴ふるく白すは電のさ  
らら白ゆとちん神の馬をハ

重五  
胡及



標

ゆかりの標や次子家の大かり  
標の世阿弥まつりや青かたら

立圃  
嵐室

大福

大福くや淡路もみさん茶臼山  
大ふくやけつとそりる江戸茶臼

鬼貫  
正安

菫固

とがとそりやとんえさして水の恩  
菫固や鹿考の種はあらんやと

言水  
直良

書物

書物や行年七十梅洲の位  
ゆとりとやうふゆくとてきこしめ  
虫とりもまるや鹿の支をかく

宗因  
其角  
貞室

屠菫

ととの酒へのり玉菫の小亀うた  
屠菫酒や武彦舟も君う万壽盃

季吟  
正隆

雑考

さうふ考や五代の教くむかしのを  
庭寛牛もさうふをとりわのちり

とて  
其角

大著

大著や和泉の松木えいさうは  
ゆとりとやうふの役は持とて

唯笑  
秋坊

萬

字

まんさのやの富士の山表あけのま  
流れてきてふあすのせり万寿樂  
万葉のやうと隣は明りま

青雲  
一井  
荷兮

蓮集

蓮葉の初めとるや芳根の云  
遠草まかけくかきるや花細  
草葉あけ山城密棋やみかろし  
蓮葉や船の近れか入るくと

其角  
公未  
維舟  
湍水

鏡餅

古ふも日ふとせとまのほ鏡餅  
いふくやよね一汁料の澆りち

宗因  
貞室

若

若水や凡ふ年のほる魚まを  
つろ水やふふうくくき露氷  
つろ水をらちててまよ雪の掛  
あまらふ輕のまよほ涼一まよ

風鈴  
武仙  
亀洞  
角

玉

年玉とこれうもてもえ方うの  
堂一とまふ吉風をあうく扇うな

可夢  
徳窓

遺羽子

羽子板の繪松葉花ややとの春  
うね伝く羽子といひま子供うね  
をこ板の篇よりまは雪

季政  
満水  
吾仲

角

生死れむう一男とと水らうひ  
をんがりの森やうと許み鏡ひ

其角  
丁我

子れ日

松脂のたう膏薬の子れ日う有  
腰をれ一子の日れ歌やしきりま  
をたれて跡もけとへん子の日ハ

貞徳  
季吟  
貞室

小松引

控ひくやあ糸このはるる 姫小松  
加賀ふ小松引や越中か次とま  
引つとて松をくらの由は嵐うな

宗因  
幽山  
其角

七種

七種をこるんううさ手首う那  
七くさや跡母うかや朝かふと  
七種をたききたりて泣子哉  
七さや粘ひあうけく切きさみ  
七くさの枯あふあある草履哉  
七種はくやーそめてや七ひやうー

嵐雪  
其角  
俊似  
野坡  
泊徳  
貞室

薺

四方より薺もあまらうりて後うね  
六日八日中も七日のなつちるうね  
うかれきて薺もあまらうりて後うね  
一年の公拍子もなつちるうね  
風流つて石もあまらうりて後うね  
薺うね薺うねをさあ 胡蝶  
草枕なつちるうりて後うね  
まらねあまらうりて後うね

芭蕉  
鬼貫  
舟竹  
無論  
嵐雪  
其角  
山川  
此筋

まの草

誰う家の薺油もあまらうりて後うね  
まらねあまらうりて後うね

鬼貫  
來山

# 菜若

隣はくらくくたぬひさる若菜我  
 其の野ははくくたぬひさる若菜我  
 きくくくと雪付てこよけり若菜我  
 梅若菜我りこの宿のとり汁  
 つる菜摘めとら木を割畠うな  
 うかれ雀妻よと里の船けり菜  
 一かふの牡丹の寒き若菜う船  
 くら市やまふ漕ぐはけりな舟  
 霜と若菜雪に樂まる若菜我  
 精出して摘ともよえぬ若菜の都  
 吾らくも残りてわらぬ若菜うれ  
 若菜をよふ若菜をよふ若菜の角

負室 鬼貫 来山 芭蕉 越人 其角 尾頭 嵐蘭 嵐雪 野水 素秋 素イ

# 芥

必出く隠く跡のころなこの都  
 我らあゝ鶴とこのころなせりの食  
 油ふ響芥梳はなうとこの素  
 摘よりのもえりかひひまるとる根芥我  
 芥摘とてこけて酒かたむきとくれ  
 初齋やあ田の小芥らと氷  
 芥はしや歩行一とまこひてけり  
 名也けり芥の白根のかみあふ  
 地の底は雪引出と根芥の角

芭蕉 其角 亀翁 且藁 定耕 野徑 幽山 負室

小春

梅

子鼻うむ音さ人梅のさうりこの奈  
 高嶺や海よりくれてうそのお  
 には根の梅ひらきさうり燗出  
 梅う香や乞食の家ものさうり  
 梅下しやさうりてわう梅のとな  
 さうり形う梅もさうり月夜う  
 病後の庭よく梅のさかすうな  
 梅の氣の氣ふらうねけしき哉  
 おりうま女遊ふよ梅ハ敬ふはち  
 瘦義や作りさうり軒は毒  
 こまうふ咲さうり杯と梅の氣  
 日あうりの梅さうりさうりや角牛屋

芭蕉  
 去来  
 大草  
 其角  
 嵐雪  
 野水  
 曾良  
 越人  
 惟然  
 千那  
 野坡  
 支幽

花白ふ梅とさうり双のこさうり奈  
 ありてさうり人の香もさうり梅の香  
 北面のえけひらんまとのむえ  
 星とりさうり梅のさうり梅のさ  
 梅一本はさうり草のさうり梅  
 梅をさうりおのれ花もおのれ  
 白雲をさうりさうり梅の香  
 奪る居く折れをさうり梅は花  
 あうりさうり梅の香  
 梅さうり湯屋の宿さうり梅の香  
 毒さうり白の梅木のよきまこのり  
 梅のをねさうり白ひさうり梅

宗祇  
 貞室  
 季吟  
 宗因  
 露沾  
 鬼貫  
 竹亭  
 鷗歩  
 万乎  
 利牛  
 曲翠  
 來山

柳

ちねりのふ柳のさつるあやう人の那  
下風もまうしてあうりのやうきさる  
池もあみとりのをいそぐやうたかき  
うみの日を柳母やうて川をさよ  
柳うみのとねのといひうと日の月  
沈み静まーかきうきあふ柳うけ  
おのひ出さうりのさつかき柳うま  
傾城の賢あふこのかきさう  
目もあ枝はくさや柳のあま  
青柳のくさしてあま板戸うね  
引よせとさまーかきさる柳のあま  
ゆきともなうとさつりやまきさる

芭蕉 負室 宗因 鬼貫 季吟 素堂 戈管 其角 嵐雪 冬来 丈草 越人

尺をうりともやうさうさなる柳のあま  
さうれく柳も風もさうりはくさ  
よとと川柳ともさるまき柳のあ  
朝日二分あまきのうとく白ひさ  
とねのをもつして柳のあまきさ  
障子と一月のあひうと柳かま  
町もうくあうさう宿のやねたうま  
せまきさの尾ハ又はけさる柳か  
やふの雪柳をうりともさうさう那  
ゆき風も牛のくまきむく柳かま  
青柳はあうれや鯉のまきめとさ  
あうさへきさともさー指やうさ

小春 一笑 尚白 荷兮 湖春 素龍 利牛 一風 杏雨 探丸 一啖 春水

野老

とこふ賣声天糸のまきとひるり  
夢毎ふらとや野老や市の中  
のあしや今も丹波の鬼ところ

其角  
苔蘚  
真丸

下篇

下萌や尾こそとゆるのここれ雪  
下篇の氣をそけさやまめ名

二川  
李由

若

草

若草すやまきのめの箭えも木綿香  
けう草ふらと川祢うまうや羽うまを  
立白ふらとくまをそんる羽玉う菊  
つろくはもか下篇つすや二足まて  
若草まけふ春駒のまをけうま

若角  
野坡  
龜助  
問津  
良俊

椿

うとひまのまおと〜る椿のな  
曉のはらへまあうはつとまきう那  
藪ふらと鯉まのほらぬ榎うみ  
鋸ふか〜まめこんせ〜く危つとまき  
まら玉の露ままきつ〜けりま我  
校ま〜伐らぬま〜ひを榎のな  
ちり椿あまのりらま〜續て〜る  
取あけて〜るや椿のあそのあま  
榎の枯〜るま〜と〜つ〜る我  
口紅のちり〜る〜玉は〜るま  
土ま〜る羅ま〜ちり〜る〜るま  
箱入やかの海底の玉つとまき

芭蕉  
荷兮  
卜枝  
嵐雪  
車宗  
湖春  
野坡  
洞木  
残香  
鬼貫  
孤屋  
宗因

紅梅

紅梅ハ誰ふと一音の添小袖  
梅や紅人のけいふの初かみ  
紅梅の教多や仙家お庭の雪  
お梅やふね出はくろ玉さき  
紅梅やかの浪岡寺やふれ垣  
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺

立圃 鬼貫 元永 芭蕉 汜徳 蕪村

木芽

そやされとさうぬ梢も木の芽哉  
木の芽さうの雀かくれやねりあり  
られーも去年の残穂の木の芽  
まのめまて四すをささるれまきえ

露川 均水 野蝶 玉鞆

名緑

のえんやうう入神の連杯のりろ緑  
さみり神のくぬ松ひねりれと  
黒あとの雲のささるやまのみと

鬼貫 末山 土芳

落の塔

駒とえて雪えは僧ふ落の塔  
雪まうく出塚の切目や落のう  
生てある落のささる山路うな  
その白ひ紙燭消てもぬきのたう

其角 拙候 即草 調竹

莖

莖ささるや五徳あうりままの  
ささるたれそ蒸えささる明中  
沼賢人莖ささるの園ふかれや

百里 野徑 一露



五加木

喰らておのまふやそいじりませ五架飯  
うこき頃とやらの客をのそきなり

鬼貫  
几董

す  
み  
き

何のきもはうねい去年の莖う角  
縁ふじしと馬あひのうね莖草  
おのけお松の葉うろく莖うね  
莖叶小端めらひいあとやこれ  
法度場の垣より内へそそこ我  
葉新くすすれえり知と童小  
堤よりあらうひ落れはすうれいのま  
松うけおさくく硯のそとこか那  
とうねるもりのかまきおと莖草

忠知  
荷兮  
夜章  
曲水  
野坡  
鳴歩  
馬菓  
如負  
その

鞍  
料

は  
び

薊

たんちのめさのてらおね日なみ  
鞍草やうそそそのまうおまはりこ  
あんけい、の物しこの日と佛の坐

普松  
栄春  
衛門

まこくと摘やはまの葉はりし  
はしくし頭巾にこある紗と列より  
まこくと親子はみろりつし  
春雨もたなきおたり土筆  
まこくとと案山子のけろと太筆

其角  
音江  
舟泉  
元志  
蕉笠

行蝶のとありのとまねあここう船  
をらうこの野辺のあこみや隠形鬼

燭遊  
三丸

木瓜

草豆袋や野のあつらふ木瓜の巻  
かけらうの底で焼くや木瓜のこま

銭蓮  
芦文

芦角

ゆじまへみくろ角出と濱の芦  
はのくろやとろの鬼のゆり后

路通  
勝重

接木

捨物ゆ梨の接穂や山をき  
はま下のかくしう接穂は  
世の中をまこえかきふね接木哉  
長れさや接木はうねの咲おくと  
一方を梅さく柳の接木この南

芭蕉  
傘下  
淳兒  
清門  
越人

獨活

雪間より落葉のうらまふう那  
せらへなれ身の瘦あたり柳の獨活  
いとゆめも白ひまきのをせはくろと

芭蕉  
嵐雪  
配力

茶搗

う治よまて屋風みゆる茶搗を  
柴舟の里へ茶搗の水けうと  
藪の根やゆけてゆり出と茶搗唄  
あつらまきや茶山あふりあつれ  
たうの尻もてる日とろふ茶搗哉  
旅人の一茶あをちみる茶つこころ有

鬼貫  
其角  
去来  
正秀  
玄茂  
杏西

菜  
はな

菜の花や一本咲く一妻のりと  
山女の家菜花をのこら身なるや  
かしのむの小枝さふ角なりなり  
菜花は花のついでにうつる日影の  
まの花は出づやぬりま核かき  
かしの花や枝葉の土手のあひくふ  
菜のこぼれの畦うち残さうあこの  
まのまふ菜の花かたれあはしうま  
弄舟や天氣定めて種あろし  
古河の流を引つたねあろし

宗因 芭蕉 其角 傘下 園水 長虹 清洞 不悔 其角 燕村

桃

我夜中伏見の桃のまのくせよ  
菓子まきにけし人形や桃の花  
おのくの桃のしるや等持虎  
ひるふ紅ふのやあえの根の  
おやも子もあましのこや桃の酒  
桃折くつりありのくや女の子  
りののこま境ままね垣根うれ  
日の入や舟ふ見てもけりめをる  
金柑はまご盛りなり 春はとな  
梅さくら中とたるまをりのの  
角菱の餅おありとも桃はま  
梅の歌ふなりるものとも酒

芭蕉 其角 嵐雪 桃隣 傘下 羽紅 鳥巢 一髪 水鷗 鬼貫 貞室

海棠

海棠の花ハこころの夜の月  
海棠ハ女前と猫とカクカク好  
海棠の花ハゆるぎぬ丸藤うか  
海棠の花のうつやあちち月  
海棠やおハッちちと堂のあ

普船  
卜宅  
豊重  
其角  
史邦

連翹

れんきょうヤ茶山吹と捨ささる  
連翹ヤ柳ふあふふ月響み  
とんきょうの白ひくく庵の風味ふ

巴静  
麦雨  
峡水

梨の花

杖つらと人のまきりまのとな  
志のこころをまきに似たり梨の花  
ま山吹はあま湯とあま水

鬼貫  
許六  
野童

杏

杏の花ハゆるぎぬ杏のこころの  
杏はとちかや甘味の一トかま

貞徳  
暮四

辛夷

瓜紅もこころとこころの花なれを  
ゆるぎぬの鳥ふくゆるぎぬ

羽長  
梅車

木蓮

志人の葉せんをねん天目ねんけ  
物らとねあやうしく木とんけ

貞因  
安静

竹筴

草むきやひをりか上はあれり  
ろこまの奥ふこころの雛の夢  
一朝ハ一はあけやまのいろ

鬼貫  
沾徒  
春水

# 苗代

苗代よ志のちうとや尻しととき  
 うらうらや府政のほる畔傳ひ  
 迷うん苗代ころの田は福とと  
 苗代や八き組はく出雲殿  
 人形はからうまのりまたてうお  
 苗代よまうやかへるの奇の種  
 ならうや此土をかへて隅田川  
 晴道やあらう村の角大師  
 ちとくや苗代まふあくる風  
 苗代や尻居く行てまとはえ  
 まとくはゆや熱るの襦ちりふり

嵐雪 宇角 永花 木也 元春 徳元 資仲 正秀 仙化 鬼貫 芒村

# 蕨

早蕨や深谷の雪ふふととらま  
 里人を相まるととらや独活とらむ  
 菜刻この上手と極る蕨この有  
 ちやんや久米のまら山をら蕨  
 とる人ふまをまけまるとらひ

貞室 宗因 其角 幸順 勝政

# 藤

関こそえて愛も後うらうとき我  
 白髪を破味ゆふはくふ常うね  
 小坊うふはなけからん松よ藤  
 風なうて静とときうりあちのむ  
 者の柳やうてくむ人のさうねや  
 松よ後鮎木ふのほるけらあり

宗祇 其角 嵐雪 杉風 貞室 宗因

# 山吹

こころもふる居の後のほろと哉  
ととも世を度ふ深と一墨ころも  
山藤ののりとのゆふみ机の南  
あつらかく岩うらやや麓のそま  
麓やた君もふれさるをとりれ

荷兮  
宗汎  
去来  
丈草  
その

山吹やふまふささく人ま枝のなを  
月雪ふ山ふき花の素敷よ一  
山吹の衣の黄令の肌志の南  
やまふ花や垣ふ下とる蓑一重  
一重と山吹のそく夕初るれ  
山吹もちるうみふの舞さまを

芭蕉  
生角  
季吟  
園指  
際雪  
洒堂

# ほし

さりのたて山吹のそく岩根の南  
山吹と蝶のままれぬあじうね  
やまふまふやとえあふ流の玉うら  
山吹やさくて樹ハあゝのそこ  
やまふまふやた久て流る花の水

蓬両  
ト枝  
貞室  
鬼を  
半残

花さくそむりふどりく赤はくし  
裾山や虹吐くあとの夕躑躅  
亦これより木を一見のつじろね  
白ほしまほくやうら角の楢  
手一さくひさののそくやつ一山  
さくこのそく窓へはくしの日くら

宗鑑  
芭蕉  
共角  
嵐香  
去来  
丈草

清しきくらしやうららかにる煙を  
山つし海もよとや夕日かき  
まらばけ浪白くまつしうね  
老ふけいそまもすや岩はじ  
あつしはつしめ露や羊の乳

桃隣  
智月  
氷花  
幸茂  
負室

鶯

鶯ふ感あふくけのこやー  
うらひとや氷もぬこま朝日山  
笑もるや茶の木畑の朝月夜  
うらひとやけのもまけん群うさる  
鶯はかこさそとえれゆとり降  
うら飛ふ雪とさ茶を垣越は

芭蕉  
其角  
丈艸  
去来  
嵐雪  
一桐

うらひとややとや一声のまらり歌  
鶯や空も空もさそなうら  
うらひとや教よまてうはあゆ水  
鶯や門はうらうら豆腐うり  
うら飛はふあ取こまてあーとこれ  
鶯の二足よな門くゆつるこ中  
うらひとよの声よ起りよとめかを  
うらひとよのまやつらうら雪の糸  
梅をや鶯のこまおせりそと  
うらひとよまーこもかまや新玉を  
鶯かちひさた教も捨るは  
鶯は清うさるけりうら糸うら

溪石  
魚白  
鉄枝  
野坡  
梅舌  
心圭  
桃隣  
桐西  
山川  
夢々  
一笑  
唯然

猫の恋

うらひとやまふ丸ふる声のしら  
 うらひとやまふ枝よ葉其とく  
 黄鳥や國栖は翁の笛の音子  
 麦飯ふゆらと恋う花このはま  
 うき友にわが道と猫のそらなうめ  
 深窓の頬も紅うらやひさう猫  
 葉多やうらとを猫のねりうね  
 巴う脊やうらとを猫のねりうね  
 かねも恋猫よ伽羅焼てうらねり  
 足跡を妻とらふ猫とや雪の中  
 維新とて柳うらとを猫を鑑は教

宗因 鬼貫 負室 芭蕉 去来 園指 牛寂 秋色 嵐雪 其角 沾徳

白夷

猫のときあつひの見や片おひひ  
 うき恋ふたなくとや猫の盗くひ  
 のら猫やうかれゆくと松の中  
 うきとひ濃葉射ふのうけ猫  
 白夷小價あつとそらうみたま  
 あつ夷や漢氣う葉よあひるうら  
 あつ夷の紺ふらるりのよ水の泡  
 白夷のあき白ひや枚のはし  
 あつらうやあふかた細し  
 ふらをの骨や式紹う大江中  
 白夷や目まてふを月へあふ

琴風 支考 支卓 野徑 芭蕉 其角 負陸 之道 拙候 荷兮 鬼貫



鳥の巣

巢をとりあふるや世とる下造  
巢かくるやあまればの考かき  
巢をまきしもや子あはれ祝ふも  
るの巢よ去年のきおき祝の声

昌房 之次 一聖 鬼貫

雀の子

人あぬけくも別けり雀の子  
魁ららふなまきとすちの子廻る  
荷鞍ふひま夫のとくめや縁の先  
日の新やこりくの上の祝すは  
啼々や爰ふ教るは村とめ

鬼貫 河飄 土芳 珠碩 宗因

百子鳥

おもとくしと羊の冠の百子鳥  
五子鳥都々別の日和の南  
川上の折々梅のりりちりり

鬼貫 尚白 其角

雉子

父世の志きりふ鳥一雉子の聲  
人らとじ雉子をとりは休むの声  
鶏のをひかたらん雉子は雉  
何のをあま新そ福ちひく雉子の照  
下壇の声よそあらん南都雉子  
高声よはくをあらひる雉子うお  
おのひ子と何るよ似たり雉子の声  
行かして塩糰といてする雉子う有  
身ふふひふ雪向の雉子れみとり我  
一ふふも之声もるひぬきとと那  
らうじやまふむ科はなれまき  
ゆくはのあてしきや雉子の声

芭蕉 今角 夫未 丈草 嵐る 一雪 千那 塩車 漱士 衛門 言水 鬼貫

雲雀

雲雀よの上よ身をくまふ峰のま  
あふのまよふ縁をえん野辺の雲雀の  
胡蝶よふ目しむるうろを根のそら  
追ふくくつ 驚くせけり夕むしを  
羽おらけをいづくへの雲おるく雲雀  
枝の木と定規木のゆる雲雀う羽  
帆けしらのせきよりおろしひより  
乃のまよふと障子とる日を啼きしり  
棠摘のゑくろふおらるる雲雀う  
口とくを雲ふかけぬるひよりう  
彩虹やおうしひよりのちくらくさ  
筆よ入るくとくす鋪へおる雲雀

芭蕉 除風 文草 翠袖 滑橋 氷花 其角 如泉 言水 梅盛 素堂 定因

帰雁

そのまよふも北へ帰雁の山路に角  
あふれやあうるまかきまうる居  
ゆく雁や花をまよふきの島かき  
居啼てりのおあちるや花の以  
小田久と鉄も柱やのくは居  
かくる厂 岸とひ鉄る勢ひなり  
まよわく今や紀の厂いせの雁  
行厂あさくら下まきほけくよし  
まてや居をれて周防のわりけ瀧  
ゆくとを田螺ふらひてかくる雁  
かくる厂富士の裾田の砂ふく  
うろ雁田毎れ月の曇る夜ふ

貞室 鬼貫 水哉 未山 其角 嵐雪 以雉 几峯 楓子 子英 長雅 蕪村

玄鳥

簾よ入りて美人小別う、燕うの  
影多ふ裏ははるあのかうひ  
あそふともけりともあふね乙多  
傘の糸ららかさうよね乙多  
はむらゝの雁も回てや鳴まら  
笑やふま出されと、はるあう  
いままこといらねとりのま多  
燕や田ととりか人と馬のあ  
巢の中や牙と細くしておや燕  
かろけも下初くものつとあう  
土車引も休むはをめか那  
船綱よゆるあ仲の乙多

嵐 瓦 非 去 来 其 角 丈 草 荒 彈 俊 似 野 童 峯 嵐 桐 兩 舟 竹 巴 山

駒

琴のねの鼻もこころはを  
老傍のま炸火をまよし燕う  
ころ細みあうとゆるつとあう  
こはまのまふ似合しき白浪  
朝のやや人見ををあて弱まの唱

枕 舟 合 志 小 春 長 虹 捷 花

鸞

鸞のたつや赤襟うりて日影  
機糸ふさくうこのまやま  
糸の雪はうとやうとの琴の音

三 章 山 只 指

麦鷄

麦畑うきまよとまほら  
あくとなく、鷄の夜の夜明う

沽 徒 颯 竹

# 蝶

蝶のとぬきとうり野中の日影うね  
 移る蝶より多くあやとさるこころを  
 らの蝶を兒のふん出とを笑ひう有  
 蝶の奔あつる様ふらうう 影ふか  
 とはりのとも 翅とらうとく 胡蝶 我  
 蝶のまきてむとよ 移りけり 葱のまや  
 初蝶もふておく 芥子の二年あか  
 かやうらの中 飛出うらう 胡蝶うね  
 枯芝やと 寄集ふらう 移り行こふ  
 空を飛して 飛せりしき 胡蝶うね  
 沖の蝶 汲さるとまてを 移り我  
 世の中 やてふく とあれか 移り

棹琴 其角 柳風 園指 柳栝 丰残 好春 吹玉 百歳 雪窓 戈磨 宗因

# 蝨

# 蜂

# 蛭

細小あそふ 蛇なうらひそ 支とあ  
 この蛇 火あそふとて 煙のうら  
 人もまきて 長き日 飛あれ 蛇の声  
 糸ささうら 蛇とく かきあひしう  
 蜂の巢や 留まるとて 飛り盗まれ  
 まうとく や 飛渡ふ 蜂の往かへ  
 山吹ふ 移れらうらうとて 声  
 とららの巢や 一回く 見  
 野田村 小蛭 あえたり 黄のと  
 石一ツ 渡きまうれ やらまき ありみ  
 蛭らふ 知けもまて ねまのうれ  
 あまうらうら 蛭とさうら 胡蝶うら

芭蕉 其角 星泉 乙列 杜洲 園風 沙鳥 蘭二 鬼貫 其角 幽亭 好真

蛙

古沈や蛙とひとむあのおと  
よーまーやまての林とひかま  
田の蛙や虹と脊負くく啼く蛙  
ちんを月様みそめるさきここの角  
松風をうちとてまぐ様のを  
山の井や墨土のこりこふく山蛙  
まとうけて折ふのあるかまらうま  
まろくと我頬まうりるこのまのうり  
のろまき尻らつろーまろふ鳴かまの  
ららひふ様はくさふ浮きふあ茶  
尾を落くくまこ啼ぬぬ蛙う角  
とまろの江や火と焚舟ふまう蛙

芭蕉 嵐雪 去来 其角 丈草 杉風 工齋 嵐蘭 越人 仙化 蚊豆 牙磨

田螺

蚕

いとほひて身りあるかまらう角  
から井戸へといとまらひー様うれ  
糸の道ふされもさー出のからり我  
袖よととらん田螺の海士のひぬとまこ  
入るる 鯉もあねふ田ふーから  
里人の時おとーらる田ふーお  
行るの中ふまうらや田螺とりの  
景政は目とひらふたふー我  
孫とももの蚕中ーさふ日向う角  
庭ておまうて冷うてとまらる蚕我  
らまおろとまの羽かろー派蚕

宗濂 鬼貫 宗因 芭蕉 丈草 嵐推 交浪 其角 其角 知足 陽和

鮎

鮎の子れ白魚おろるりてさう有  
とる鮎ハ糖の一葉小足らぬあり  
水澄き一網の目おまき小鮎うき  
鮎小ゆき花の帯次乳房のち

芭蕉  
戈磨  
重政  
素堂

飯鮎

いひだこのかめいやあれて果るけさ  
飯鮎のおのれ豆くらふ河内越

末山  
沾徳

落角

一の谷さやまある鹿やおと一角  
角おちて大とみまきや庭の麻  
つの落一カやあつるあふれを  
角おちて之日をうは男麻うお

一夢  
琴風  
近之  
朱松

佐保姫

さるひめや京うらへんの奇の母  
佐保姫のほくら硯や筆の海

可理  
如流

しんき

しんきてふ家初らほ道のちるん射  
いしくや大和四月とかさかま  
砦よと貝酒ふれありしつと月  
待中の四月ちるやくらり月

貞徳  
鬼貫  
言水  
揚水

らま

らまころあまきまきまられの嵐うお  
まきまられの自夜お柱ん葉は苗  
二月の雪とけておつるやとらも川  
まきまらまきまらまらまの蝶の羽  
まきまらまらまらまらと押交

芭蕉  
蕭山  
之次  
惟然  
千那

弥生

淮國もやよみの海の道千筋  
三月や春はけりき北条下木  
さくらさくら弥生五日ハ忘道まー  
富士小流あて三月七日八日うき

露 佐  
去 未  
其 角  
信 德

左義長

左義長やこと一の相次帝一紙  
左義長のそらゆもあたら農水

旭 芳  
幸 以

霞

小泊津や眼鏡もよその霧我  
あかこももころや潮あはまうは  
里かよむゆふ火松のはりのかさ  
行くて程のあつらぬうきみお

宗 因  
鬼 貫  
野 水  
壘 交

花とあて移入あまこむかきここの月  
三帆舟を漁屋ふらううはみうれ  
えうくまふを築らや一々かきこ  
渡ささや歩さもゆんまこは農  
破見帰とすまうかこる農うれ  
つこをあてかろけ火持うき我  
浦くの空お帆かろのあまみうき  
我宿もよそよりのくは農あ家  
八重かきこ奥まここは農田代

嵐 雪  
其 角  
越 人  
岩 翁  
子 英  
冰 花  
風 洗  
月 下  
社 國

# 朧 月

唐尖可の松と花よりあはらみき  
 夏のしづよ闇のあけくの朧月  
 大原や蝶のあて糸ふおちる月  
 おちる月まことまきさねはる月  
 ちけ山や籠の月れささところ  
 中川やけらるるともおちる月  
 山あひやたしよりておちる月  
 夕かきとみくまて朧とまきところ  
 おちる夜と白濁りのまきところ  
 朧夜は雨あやうらん猿の声  
 ねあちる月まき物まきあちる月  
 朧くとりあちる月まきあちる月

芭蕉  
去来  
丈草  
仙化  
式之  
嵐雪  
元峯  
胤弾  
支考  
沾洲  
女誓  
鬼貫

# 凡 巾

物の名は鮫や古卿のしづのほり  
 かろしづや江戸かきまきねる巾  
 糸はくろ人とあちるやしづのまき  
 夕くれのりのちきまきやしづのまき  
 しづのほり雨のあしづかきまき  
 しづのあちるまきまきまき

宗因  
其角  
嵐を  
女誓  
トト  
園風

# 藪 入

あふりりやひとつあちるまき  
 藪入や浅草うけて芝の海  
 あふりりやあちる月歌の酒は碎  
 藪りりや我あちるまきあちる  
 あちりりのあちる小豆のあちる

其角  
琴風  
専吟  
咫尺  
葦村



飯

花もまう埋火の飯さる飯さるの事  
ひまの手の徒おきー山とつら  
傍山の膳がさくさく竹葉さる  
繁の戸村火跡ちひさけ飯をさる

定義  
其用  
野童  
其村

冴返

雷やひとむらさあのささえかたれ  
ささえうへからさあをささえさる

夫来  
桃盛

燒冊

る啼て燒野のあられさるうれ  
はやくと燒冊村早きつらひさ  
山さると小松の残る中け冊の事

乱糸  
曲之  
木

雪間

らま中あられて雪間のよあまうな  
光陰の矢間あけさる雪間あ事  
草葉と色ひさあもなれ雪間あ  
酔とよて雪葉摘るさき雪間あ

きて  
兼次  
其前  
万子

残雪

木枕の垢や伊吹あのことるゆき  
かきと消て富士を裸よ雪胞より  
雪残る鬼獄さしき泳生う有  
舟くの小松小雪の残るけり  
軒の雪盗人あさるの取のとー

犬草  
其角  
言占  
且兼  
負室

東風

徐々東風さる雲のりさきうれ  
暖簾よ東風ふくつせの出店あ

去来  
蕪村

春風

春風や人声く川に流るる山  
く風也こころを離の駕籠の尻  
まうせふねきもさうらね羽織哉  
くう勢ふ吹出されたり水の胡蘆  
けり風や堤こころをくく声  
世をうぬの法師の旗や春の風

芭蕉  
茨子  
亀翁  
去来  
来山  
基村

雪解

北國の賣を夜見まをる雪消哉  
雪消て大声あつる小きう有  
松の雪まきえとや声をあけり山  
雪しるや蛤いりとあいのとこ  
きゆる財ハ氷も消くこころはるり  
氷消く風あおられそまうらま

沾徳  
樞隣  
春泥  
木白  
路通  
との

春雨

不仕さやかきとまましー美の雨  
くささめや田舎のちがら鯉うり  
春取れあうるや軒ゆかしくさく見  
けりささめや山より出れ雲の門  
春雨や何うらららん嵯山茶房り  
くささめのもう帰ふ馬のけのけ我  
美さうらふ九つあまる枕の南  
く風はち守我多まうひの行所  
けりささめや節きりのあか枯つじ  
美ささめや枕くらねくうらひ本  
状くね江戸も降きり美の美  
春雨や急や川人けく流るり

芭蕉  
史邦  
羽紅  
後雖  
丈草  
堤亭  
秋色  
芥舟  
其角  
支考  
鬼貫  
貞室

春 雪

酒をうてぬれてゆきけり 其の雪  
淡雪や雨ふあつた ともほれは  
ふるけしとことしん 初と春の香  
下着の氣をけしや 其のゆき

来山 風麥 直重 李由

去 日

かさ山やけしゆく 山は去日うれ  
去の日や塵ふ花の砂あひく  
如意橋や斬もかくと 其日朝  
船橋も去日めくむ 其のあや

貞室 鬼貫 其角 浜徳

暮 夜

其の夜や草津を鞭の夜とより  
春は夜よ尊は山 西にすまう系

其角 蕪村

春 海

青海や古鞍ゆきまゝの こと  
えは行遠山 雲の春は海  
松崎や旭ふゆき 其の海

素堂 芳川 不卜

春の 月

其の月琴子物かくと 其の月  
床よりん 雄客なりけり 春の月  
春月や下合堂の木は 間より

其角 沾徳 蕪村

去 日

鐘はうねささる 其の音  
立籠て淋し 其の音  
赤猫のうさく 其の音  
糸や根ふさく 其の音

芭蕉 普船 山店 貞室

まきの時

ありあたる銀のひかりやまきの時ら  
たるの野やらのれの竹ふくふとえん  
塔の并雀をととるまきの時うす

杉風  
羽紅  
貞室

春せむ

たるの水ふ秋の木れあををるえを  
春せむあかうく社書のふみだしらん  
物ゆるー魚の兒えれまきの時

嵐雪  
其角  
沾徃

水ゆるむ

水ゆるむとろや手鍋もおりぬき  
汲ふ出く髪とく水のゆるこころ有

阿漕  
文水

海雲

りつくよ海雲をむ近朝日この  
まきの時あ海雲まらーつらう橋

峡水  
抱月

海苔

かきよりのも海苔とハ老の春もせせて  
海苔とくく水のなまふかえ都鳥  
人のこもさくわてのそや橋のりて  
まきの時やうーちふしらん磯訓雲

芭蕉  
其角  
杉峯  
尺草

寒食

寒食のさとこひーけふそあひひ  
ひの火もまを食の日は腹立そ  
まを食や旅人の雪の路まをまを  
今寒食とるまを食は家よハ自刃ま

桐雨  
氷花  
月下  
其角

草餅

雨のふも草餅とさくくや草の餅  
伊吹山あゆむ間あそく草餅餅  
くき餅やうあさくきも餅の白ひ

芭蕉  
政玄  
埋然

# 陽炎

枯草やまうさうきうらぬの一二す  
うけうらの抱付はつらうらもろ角  
かき流るや巖ふとけけらうら  
陽さや足りともつて戻り駕  
うけうらゆさし矢の沈む中比  
あきうらの昼と炉中のきさうぬ  
陽さふ隣の葉さ人とさうふり  
うけうらや障子のゆらふ金屏風  
陽炎や小磯の砂もふきとてと  
かけろふは夕日にいんはきり我

芭蕉 越人 配力 去来 山川 達暑 犬竹 普然 其角 舟泉

# 系遊

系ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆと系遊やまゆゆゆゆゆゆ  
ゆと遊やゆゆゆゆゆゆの人仕ゆ  
系ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆと遊やゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

芭蕉 乙羽 氷花 鋤を

# 二日灸

小窓窓窓窓窓の日はと二日灸  
二日灸灸灸灸灸灸灸灸灸灸灸灸

その 几董

# とろり 午

初午やまの錢よみハ芝居うら  
とろり午やあやせんつゆあまひとじ  
はつゆ午や磯をうらえては戸開  
初あまや稚ゆゆゆたうらつみ

其角 支考 野坡 川支

彼岸

御忌

夕の午やほとり小霞む通り筋  
初午や妻の影をむ素浪人  
夕の午や役の行者むあな踏次  
初午やその家くの袖うみ  
精進とまといふれ親の日暮る  
彼岸ふくひうん橋のちりむまり  
渡し舟武士のたてふる彼岸火  
携さくひとくみ弥陀のむえんか系  
御忌まわり都小錦珠数袋  
御忌の鐘ひくくや谷の氷ま  
日小霞月小氷や御忌の鐘

立圃 沾徳 壺月 蕉村 末山 彫棠 其角 支考 言水 苙村 儿董

涅槃

西行忌

神垣やおりのひもひけき涅槃像  
さる月と小千とむおことうま併  
孫子小のともまてまを死孫らん我  
まそつたの日記もよや十五日  
このむしや常のまのまき涅槃像  
ねらん命もはねうら赤死日の光  
天人も泣教うら一孫らん像  
銘詩の文あまわれ涅槃像  
西行の死出路を旅のはしあう  
毎りよ彼岸さくくんまふよる

芭蕉 宗因 菘子 鬼貫 野水 言水 已百 希因 其角 杜若

永  
日  
き

永き日也遠近人とならふよや  
職法の何れも是るる日そ長き  
日さしはへまらるる遠き瀬田の橋  
永き日也遊ひまきくり大津る  
かろ日也子小はゆいそ夕くそ

芭蕉  
兀峯  
許六  
宗因  
鬼貫  
道春

出  
代

出かろりやその門は離辰の市  
お勢や照日ふ下結をとりて行  
出ろりの間やゆきふ花のと死  
出かろりやは無の泊り遊女の果  
お替りやあいのなるそかちけ者  
出ろりふ國司王丸の鳥籠也

嵐雪  
知足  
浮萍  
幽山  
曇言  
肅山

離

出かろりや人おくせらも連元くら  
お勢ふかろりや繁のゆいそ流  
出ろりやゆるまあくと古葛籠

其角  
木導  
荑村

草の戸もとみかを代を離の家  
紙うきてあそふや離のふそとを  
ころろやとや都のひまふ主婦連  
隣く離えまらあく小家う系  
ことりて移ひまそりる離の只  
夫婦離むそえのとらうみうせん  
幼るぬありのとひなりうふの離  
山崎の櫃うろくこよむ遊ひ

芭蕉  
車未  
鬼貫  
嵐雪  
其角  
達暑  
霜白  
トトク

鷄合

赤いのが五俵お上りとり合  
勝鷄の世をさか荒れ抱きとり  
あかとりは獅子ふとくく逆毛哉

笠下  
其角  
言水  
君里

改

下

現あふむ比目を踏んちほ下うね  
改下られて蟹々裾引なとりか  
入うとむ舟と陸との改下うね  
赤川あ富士のかけな改下うね  
き深まうふの改下や田植と  
帯ねと赤川ねあうね、きほ下う  
鷲籠うりて改下人の改下うね  
ゆふうふ足あとはる改下か茶

其角  
嵐雪  
友重  
園指  
介我  
沾徳  
如泉  
桃女

馬刀

一の洲へ都の客と馬刀とりあ  
多莖の馬刀うきよせん筆の鞘

鬼貫  
嵐雪

曲水

曲うや見ようよと体やとならば  
曲水や岩舟ころころみゆめ  
曲うよ椿さうね山路の浦

其角  
希因  
大兔

畑打

畠ら門おとや嵐のさくらら麻  
ちうくと細打そらやまらみ風  
畠打や傍一雁ねりのかきり  
畑らやうこうね雲もなぐなりぬ  
そと打くはれぬの爺や川白  
畑ら川やむらうら志賀の都人

芭蕉  
好風  
路茨  
荃村  
秋之坊  
乃翁



長閑

人の世や長閑か 侍日の寺林  
肩付の貴世ふまりぬ 冬閑の  
のころさを物もむりつぬ 朝露うれ  
長閑さや 空ふらぐも 風の声

其角 冬文 杜園 雨什

刈霜

ゆく病みつれなき 霜の別れの奈  
初夜後 花の結つたや じつと霜

千那 松吟

峰入

峯入や 一里おら 崎 小山伏  
まゝ入は 花踏て 刈 素足う 菊  
峯入や 雲ふ 起 卧と きんも あり

芭蕉 六亀 重頼

行夷

行夷や 多の 帝魚の 目と ちみこ  
ゆくも や 猪を 雄島の いとれ 貝  
明ぬ 間ハ 星も 嵐も ころは けり  
初ころ 小底の ぬけ けり 枝 榎う 有  
こころ ぬを 引 春や 親 志くも  
引 春の 頬 忍な ぶ かり 川う 奈  
ゆくも ちも 公 野 野の 野 守う 船  
行は づや を 一 さう お 鐘の 鐘の 声  
ゆく 夷の 夜を 移ぬ 教の 離う ら  
行 夷や 横 河への あり あり 神

芭蕉 其角 犬草 支考 暮四 湖春 野水 山川 鬼貫 芸村

古人續五言題後句集

夏之部

時鳥

うらひまの娘うらうらぬちとまき  
 はあしく水鷄ふなしく人郭公  
 ほろくまふ歩大井糸をり月夜  
 夜の後さりひ白一本まき  
 なくふまうへあつうらうふ子規  
 たそうれの聲かつうらうちと地を  
 蜀魂うらみから淀の水うらま

守武  
 宗鑑  
 芭蕉  
 鬼貫  
 ちて  
 負室  
 一幽

在明のおりておとさやちとくちの  
御成筋のうかたをくらを子規  
ほとくを神楽の中を道のり  
親と谷子の山あいのねほとくを  
清くけあまふ啼け郭公  
けさるその日くのそら孫のう有  
杜宇とぬ夜かきうくかくら我  
らうれあそ山久とれく蜀鬼  
とひあんとすうみやこの子規  
馬とらぬとるの合さりのちとくを  
くさりのち力うあまきとくを  
致あくらまき森さめうつとくを

其角 嵐雪 女札 正由 利冬 尚白 宗因 去来 犬草 鈍可 一傘下

ほとくまことそれくちの野の度と  
あひし子の口をくらや郭公  
日あひ昔あ山ちとくをくら  
ほとくまきん一声まきんは雀の声  
石昔の朝雲かろく本とくまきん  
四五月のうらまき浪や郭公  
あくらまきん定まらぬ宵のそ  
松島やあそふをうれほとくまきん  
星とく門啼けしあや馬鹿  
杜宇とらぬ夜あそ月夜うな  
湖をとらてかくらやあくらまきん  
あくらまきんあくらまきん子規

柳風 松下 素堂 杉風 惟然 詩六 卯七 曾良 團友 朱拙 樵先 智月

左眼小山花あけははらきき  
郭公あうねあきほし朝慈山  
雨の間に常ふきたりのほら  
けきまうねらうほのをりも  
ありひこむ森をあはしよ郭公  
啼くくまもかひくうあうたを  
付鳥窓くらうしとく人とあ  
青くもや舟あうしかれ子規  
高きやあれうれ中の社宇

野坡 支考 風園 荷舎 北枝 正秀 土芳 素翁 洒堂

閑古鳥

啼ゆしてとめ口ききぬかむこ  
谷こしや空ふく風のうんこ  
閑古鳥の声お脈る山崎う  
なげの淋し啼程の淋しかんこ  
風ふうね森のあけしや閑古鳥  
極さくは山田を青し宗古を  
かんこも啼や蛙の目かりとき  
草臥く其母移うし閑古を

釣壺 乙吻 鬼貫 瓢界 其角 舟竹 洒堂 正秀 支考 宗因

老鷹

山中やうらなをと老く小六ふし  
口あ似や老の学をわうりこと

支考 宗因

鶯  
さるを入

うらひさの音を入の中ニッ星  
鶯やさるを啼こ入と草叶  
嵐雪  
口水

渡雀

よー鳥や日のさー廻依飯の庵  
よーきりも小野とららじ渡の中  
社まーの縁のし我をまきまじ  
錦水  
行雲  
芭蕉

翡翠翠

河せみのとよ藤せり蓮う羽  
翡翠に折うけ竈の支藤う糸  
業言  
西花

羽拔香

羽ぬけ香啼者そりそりと崎  
そらもの松をそらや羽ぬけ香  
其角  
希因

鶉

とうね鶉のちびく小りゆん舞う  
鶉とともおとろ後水をくくし行  
見物の火おとられくさあり鶉うる  
簍望もあらし鶉はくしや川おじ  
曲江小舞のんえね鶉あ採う南  
先舟の製もかまのね鶉舟か糸  
鶉はくひの尻手くさるるか  
鶉縄むく淡玄多やニとあり  
鶉数小早瀬とみゆる鶉うけ  
かアアアアアや鶉匠のう得をうり  
らもほれ鶉畑も眠る夜明うた  
あまうち鶉とせり合ねうりあう  
其角  
急貫  
去未  
李田  
梅鮎  
淳兒  
独卜  
桃隣  
園指  
琴風  
氷花  
尚白

水雞

水札

あさるの巢

雉をきてあまのふおりの水鷄な  
おのり糸の尾やあ鷄た儀の園  
第守の宿をくひるま回をうの  
あのとりのもちらしく射る水雞  
うし海より戻りかきまのあ鷄  
宵の口啼く曇るや鷄るひる  
水札啼て日教ちろはく流の南  
けりまのて神杉ととまきまうま  
うち川や雉の浮巢ふなく蛙  
龜の脊ふたうう雉の浮巢う  
鴨北巢にま菅かさと小西う

土芳  
大草  
芭蕉  
去来  
半残  
北枝  
一泉  
尚白  
其角  
肅山  
一 柗

螢

おのり火を木くの螢や花の中と  
あさる火や吹ととまきれて雉の園  
簍けしと朝くあさる螢う有  
牛部をよまきと草のほくさ  
けしと心螢のあさるや谷のあ  
相のあま息さしあさる螢うれ  
草も木も螢くまきやあさるの音  
田のあま豆はくひひけくさる  
かましとまきをまきつまきと螢う  
あさるあまはくは袖のあさるう  
あまの夜と下とくりのあさる  
夕園とまきくもあさる酒をやし

芭蕉  
大草  
嵐雪  
言水  
史邦  
正秀  
万乎  
猿雖  
踏歩  
含咭  
水鷄

編蝠

科蟻

水辺を待てる夏はけりほくろく郡  
萩垣や卒都婆のゆひを飛螢  
石山へまことをねしきあふあふ有  
飛くけり筋ちうふなれ螢のま

宗因  
鬼貫  
嘉元  
袁左

編蝠や宇治の晒よりとくりや  
たう告し文うけけりゆとくそ風  
かそありや向ひの女房とちをんる  
堀堀や月けあつるをまきとる

其角  
子英  
芸村  
曉臺

科蟻とちや富士の裾野の小家より  
とんでとて近道とてるとありうね

芸村  
林秋

蛙龜

ひき  
之  
家

子子

蚤

明松ふさふさ樹井なぐらぬかへ  
あまかへる柳を落く益もな  
あふう啼とおひふさふありあぬる

芭蕉  
其糟  
涼唄

ひきをふんで夜の卯は花をふみ危  
夏まき附ひひまきの遠きも両夜哉

其角  
曾良

子子や流るるあらの川とまき  
ほろろりのくくや浮世のうのせ貝

氷花  
重厚

蚤あふみ馬の尿をねはらうえ  
隙あまや蚤のゆき行耳の穴  
川越や蚤ふけうはく横田川

芭蕉  
文州  
彫棠

蠅

夏は  
世し

うた人の旅少もなう人木芳の蠅  
かほ母はく飯粒を人よあこりま  
蠅よいろろ眼よ力なれどる麻う船  
珠数くりにて蠅打人のた手このま  
浦風やゆらうねを人のさるは際  
そん成打その手枕の縁うりこのま  
うんくきまう子の息は蠅とこん  
苦しきや毎糸うけ行午の蠅  
電のさきいおくとや火とりい  
あな夜半や鳥もいぬる火取虫  
夕まよとまのてまぬう火とり虫

芭蕉  
嵐雪  
子堂  
西軒  
依水  
已百  
紅雪  
九節  
犬草  
翠袖  
正秀

蚊

蚊  
柱

宵の蚊もはらうとこころハ声う形  
蚊をよけて蚊の齧やほとくきを  
旅人やあうのき方の蚊はゆへ  
血をよけいりのとやらを蚊の傍さ  
蚊の群を梅の一本の曇まきり  
子やまうんその子れ母も蚊の合ん  
蚊のやせき鏡のう人小とまりけ  
糸やの蚊や御佛供焚火よとく行  
蚊をころと中ふ蚊明る旅森うな  
蚊柱お大鋸屑誘ふ夕部この角  
蚊とくらも夢の浮揚かこれあり

其角  
鬼貫  
治荷  
文草  
小春  
嵐紫  
一笑  
一  
鉤雪  
昌碧  
宗因  
其角



蚊  
の

旅旅して香つる草の蚊をり我  
故のり本や芥子女の石取らうり  
蚊を火ふ旅とこらけまくなりのあらし  
うのり火や蚊をける方に老知とり  
指らひ一荒も出くうりたの蚊をり  
草の戸を念佛の中もろのりこれ

去来  
嵐雪  
杏雨  
其角  
鈍子  
三翁

蝸  
牛

蝸牛角ふりまけよ須磨明石  
批把の筆あをと直る角なき蝸牛  
世ふにれて踏ふみるくかとはあり  
まゝ露や角に目をめりうきつる  
蝸牛角むく夏の昔よけり那  
我むう一踏はふうたるかとはあり

芭蕉  
其角  
大元  
嵐雪  
水鷗  
鬼貫

蟬

撞鐘もむくやうなり蟬のこゑ  
蟬のまふ武家の夕食ふまたり  
ゆとりてよ筆捨松おせこの声  
さく蟬のその木ふもまゝ居つうね  
捕もうらくやうなりけみのおゑ  
まゝ啼や麦をらうりおとこゝ三  
啞蟬のかうね梢もめおと形り  
月しろふ夢えて飛う蟬のこゑ  
せみなくやまゝ眠る松の下  
吹あうと風もたつとや蟬け麦  
蟬なくや布織窓の昏射ふ

芭蕉  
釣雪  
宗因  
鬼貫  
昌碧  
嵐雪  
杉風  
正秀  
可吟  
如行  
曉鳥

空  
蝶

鹿  
子の

更  
衣

鬼灯のからをさけくや蝶のから  
 空せりや石の鳥居を啼捨  
 蝶ののびはくくかうて衣るり  
 目の玉をさうて物たり蝶ののら  
 破垣やまこと廉子のかまひ路  
 おそろしき角ふかろき一廉子か  
 鹿の子や麻正出まき音葛  
 一ッ脱くうろふおひねるもか  
 はくまことかうのそや花の更衣  
 春と夏とまき人ゆきうふ衣の  
 鹿乃見もかりのやまろや衣

其角  
 一井  
 旬空  
 卧高  
 曾良  
 柵雪  
 野坡  
 芭蕉  
 正式  
 鬼貫  
 宗因

よりの出く布子賣花しとるもか  
 扇をの暖簾あろしあろもか  
 あろもえんろろあろぬ罪添  
 帯あるしいまこ核か衣衣  
 夏衣襦もをさうやたろまよ  
 てらろしとかりまほくよ衣のへ  
 雲水小打込そあやあろも  
 ころもろ人をとろ屏風越ね  
 ろろ入著とを紋もようや衣  
 身をかくし野まをかりあろも  
 綿をぬく旅痛のせいとろも  
 とろり子やあの花あむ衣かへ

杜園  
 嵐竹  
 その  
 一有  
 傘下  
 野坡  
 秋之坊  
 琴風  
 龜翁  
 且水  
 九節  
 尚白

給

獨を野おとてこれとありせこの有  
一日より花よひさしきありせうまふ  
てらくくと登一ちきり給う那  
給着るや十里をゆらん朝うら  
初かくと木目ええとく給う那  
日お中けして黒きありきも似合危  
かこひもの中ぬまかろ給う素

嵐雪  
鬼貫  
園友  
独ト  
此筋  
湖水  
素然

青簾

らあささらふ青まふなれうそふれ葵  
其り後よりりもあれし青すくま  
あの日此縮妻のせし青まふれ  
さうりまふ千尋の糸や青簾

月下  
吟松  
女治  
希因

葵おふ

らや夏の入口涼し青まふれ  
まを簾くつを坊うもうふあまし

桃後  
支考

呉竹のよりに葵のまうりこの有  
下くの巾着かきしも葵あつり

擗良  
曉臺

まは

松原お田舎すはつりや登休之  
園くこのあふあうあやありま山  
新あてちやはるはつりの車我  
午時と実盛むなるあふう有  
平うの祭うりのあはひう船  
あうりまて鬼おさうりてあふ

角  
定克  
白雪  
玉芙  
新美  
古庭

卯月

臯月

水月

おりひ知と木さや四月の櫻うり  
 此ころの肌着牙ふち心卯月うれ  
 白雲のくもや四自のすし山  
 山城や卯月くもりの雛子のこと  
 たましくふと日月とつむ五月この南  
 かろく身を風のせらるる五月我  
 六月や風かふるまふおきとく  
 こころ自やうつそ流るる年とまれ  
 五月や朝起しころの風ゆるまき  
 六月や磯お響りはくくまをひ

芭蕉 尚白 燈外 錢芷 去来 凡兆 鬼貫 素堂 杉風 惟然 怒風

夏念

夏書

灌佛

各を佛とて月のよめの夏念うる  
 春はみや先ゆく人を見のとも  
 日次りてかそる筆の夏書は  
 流るる夏書の出たては命うる

重則 言水 蕪村 兀峯

灌佛や雛子合とる散珠の音  
 灌仏やまもともけも二年紙  
 灌佛のころのころ儲しあくるまね  
 灌仏やとや入相乃大はとけ  
 灌佛やはし並るる井戸の玉根

芭蕉 之道 尚白 百里 曲翠

新  
見堂

七堂ふや布へ余はや新見堂  
脱捨と夏の住居や花見え  
張つて軒をぬくやち新見堂

麥林  
涼併  
分江

新茶

はのてくる被をかくと新茶の好  
起くのころ後夜宿の好茶の好

考逸  
舎羅

葉

撰

松の戸をうのふせしとくふ撰  
大鞍はしつたかくとせ撰のよ  
秋葉のそり踏のりくとえりうま

嵐竹  
史邦  
山店

風呂

夏風呂や清水寺とふかかれり  
風呂の茶は夏目もらじ細く好

宗因  
重房

短  
夜

みしう夜やかめ五文字小明石得  
こしう短夜二階へこしう上りきり  
短夜次吉次々冠者に各残り好  
こしう夜や木賃もあつとをに  
みしうよやまよこ白粧の香ハのり  
こしう短夜の聲なま長一馬  
みしう短夜の百合咲けり明あり  
みしう短夜の火くさる兼て西の里  
こしう短夜の小見世明る町とつは

宗因  
末山  
其角  
惟然  
一帯  
千霍  
清門  
林陰  
且葉  
音宵  
甚村

麦種

行駒の麦母なぐさむやとりの系  
はくみ合ふ子供のくけや麦とくけ  
地あふしやまきとく小足も麦の秋  
家のしほのまや穂ふゆく夕日乾  
一徳とれや鳥羽田のこくしき  
麦ら川や内外もなれた志賀の里  
あけまよりの種とくく麦一穂  
りふ西か牛およつとる麦野う系

芭蕉  
游力  
此筋  
丈草  
之道  
重五  
玄寮  
枳風

小角豆

燕や・日・のけかさるれさくけ垣  
小角豆垣妹々垣根のあまふきり  
とられてる系下に葉のなれさくけ哉

鉤堂  
心棘  
龜翁

か  
を

かを賣りいふか人酔きん  
二の富ハ廊へおちく初か川を  
下部多ふかを食する日や佛  
ま出まて鯉よて食ふ山家うあ  
うのをあめせうたれあち下せひ  
漕はけて岸の在りか川をり耶  
かふひても先達船や川門鯉  
やの志はくく又志のかねは鯉泊

芭蕉  
沾洲  
嵐雪  
花紅  
百里  
紫紅  
岩翁  
宗因

鯉

鯉捕やなれをりりく後のとも  
橋上小鯉とひくくや毎のはゆ  
とらしてても石ふなや鯉の鮎

宗因  
妙高  
負頼

蟬

幟

昔柴を蚊をみもはるや八瀬大赤  
管ころや松よかやほふ昆陽沈  
ろろろ庭をさうー入れたり蟬の中  
蚊の声ふのれさまほしてかやとと  
おは月のささめりや蚊をのそは

去来 鬼貫 車来 曲翠 岩翁

花あやめのほりもかをる嵐うね  
うのせりやとや帝考紙幟  
雲うとよまの穂入るて帝のあり  
左右さふ横雲ころれはありと  
茶じしろの中ふまくる風のあり

其角 宗因 文鱗 百里 芦本

粽

菖蒲湯

葺ふや豊の粽は國津風  
上ろろのけや粽のそとれやう  
めろやくま粽とくまのゆき中  
トさるる初物をやー拍ちる  
山笠のゆひぬあうーやちる菴  
物さーと粽を切やか乳交り  
鈴りちりはちあふは粽う有  
揚ろろふあふあらひくちる哉

鬼貫 西吟 路通 蓬西 トく 玉笑 菴尺 甫盛

志やうふ入る湯やりひたり一盃  
あつ後よやうふの浴ふ蚊う述る

荷兮 末山

印地  
らち

子小似くる子のかきうとや印地打  
かてしとの嵐と印地からうね  
年ふるまき人のとねしや印地可

仙化  
志  
溪石

競

馬

競馬増ふ入身のりまみう那  
人の世もかうくしけくく人る  
競る持まなほとらふこころな  
唐人よ一度こせそ競馬うね  
けしそふくう房り陣の斬うま

其角  
山川  
土芝  
草士  
朱細

竹醉

日

西雲や竹も酔日の人あつち  
竹うらふくまよのせくる茶碗酒

其角  
野坡

五

月  
雨

さみくふかきぬりのや瀬田の橋  
五月雨や蚊刺のとはと端の底  
さめを雨も降るりとおちえり  
五月雨も洗しや紀伊の八莊司  
はくそねいたく武彦此の秋徳  
五月雨も堤やまきこし天の川  
さみくまの何をまよふ汲深の人  
五月雨も柳まきりまれ汀う糸  
牛もかきしを羽のあつち五月雨  
海山よまきみくれそあや下くみ  
かほぬら田子のりこそや五月雨  
五月雨や柱目か出と市の家

芭蕉  
嵐雪  
鬼貫  
去来  
宗因  
望一  
鞭石  
一龍  
一髪  
九飛  
其角  
松芳



五月雨の多や淀川文井川  
頭をまけて馬もあやや五月雨  
はみとれは持あらうらうらう

挑隣  
荊口  
里東

入梅

夕立のかしら入る梅はりり  
倉崎やうらとて雲を入梅あり  
双六の相手を嘆息とむはりり  
桐亀狩夜あを起まはりり  
松風や入梅ふりり日のあ曇り

本草  
養浩  
胡及  
銭生  
文丸

虎うゑ

虎う細そらよあやう降る  
降りの中ゆる死名や虎う雨

鬼責  
一声

五月

五月は雨あ難くらなり人の家  
たろくし峯ふも結をく五と著  
きりもみみ桃の虫をよたろく

舟泉  
探志  
樹下

夏の日

夏の日お癒き餘のりやう部  
なんの日やうらとて死とよみうは  
夏は日をまきとも湯田のあのみ

嵐雪  
文里  
鬼貫

夏月

蛸壺やとう形ふ夢をたるの月  
明くのか家お伏見や夏の日  
あらの扱や東へかり月を西  
城下や笛きうとめくあ月の月  
たあれう酒もさあたる夏は月

芭蕉  
嵐雪  
宗因  
露白  
桃隣

夏野

なみの山

火串

馬ほくし我を寝ふる夏野を  
 枯きと麦とくさしは夏野か  
 揃ふと音や夏野のまわりく  
 うつちの荒く望みし夏野  
 なみの山やうも井おほる雲の  
 花をいひけふ夏山の紫く  
 なつらまを窓はえの枕屏風  
 雲雀啼くめと物さとし夏  
 うのほ木の鬼をおそれそり  
 照射さし念佛の上を透ひ  
 覗ふ軒やかつと坐りやは

芭蕉 生林 元灌 史邦 支考 鬼寺 宗因 卧高 牛角 秋風 露宿

やまらち

田植

投らむとけりき命や桑の  
 目通りのをうの榎や桑さ  
 牛あうは声もろくき田植  
 渺くと尻尻あうる田植  
 板なりふせりあうり田植  
 音響るやせけんあうる田  
 清くと田植のまめらる田  
 露のふあ小亀おさるる田  
 山吹も巴もあうる田植  
 菅あまのあを脛よりそ田  
 白きけ声小尾のあうる田  
 風流のをしめや奥の田植

此筋 其角 膏車 曲水 丈草 正秀 示蜂 立竺 許六 管吟 鬼貫 芭蕉

早乙女

早乙女をかへく取くる菜飯を  
志はくも早乙女くふ清田の  
早乙女の手てせくりのよ川は支  
明る戸や早乙女ぬゆる其隣

嵐雪 景道 彫棠 百里

早苗

西う東うまゝの早苗あも風は音  
菩薩とくまゝとや及の餘り苗  
燕の下腹さうはさるくの那  
ゆわくけや柄よまきとる早苗登  
ふとる牙の植おられくは早苗成  
順れう捧入けり早苗うち  
とらうく一雲ある谷の早苗うれ

芭蕉 乙刈 胡布 冬市 魚白 琴風 紅糸

青田

里の子う燕舞るさる人この南  
親は日の寺へ助くは早苗うぬ

支考 臥菖

谷風や青田を廻は菴の客  
畔豆もさもみ細く青田うな  
ぬれ髪吹ふうまゝ門の青田うね  
糸帯てあともまゝらるる青田成  
凍くまや八人代の田はあをみ  
橋の小さの崎も青田うな

犬草 楚舟 汀鶴 桃隣 荒雀 知足

田中

清き橋や田草もさるぬとく水  
田のくまゝおまゝれくく富士請

山店 奚魚

扇子

誇合ふ十二の骨のあはれたの那  
手とまきひ小旗の跡つらむ扇うれ  
さらはらまや扇かうけてまきと旗  
ひくまきと饅頭おひきあき哉  
扇折子ふさるるまき化粧うさ  
小旗あけく肌のはあはれた扇うね

守武  
宗因  
大叶  
草士  
尚白  
朱門

扇

あけくくくくくく王地まき扇  
青丹より白たうららなるる扇  
らとらあふらちらのあさの白はる  
かひきよりの男まはまはらちらか  
傍草一うららさきし物初うさ

宗因  
来山  
其角  
立志  
一峰

紙帳

夜とや紙帳紙帳紙帳紙帳紙帳  
故ゆららるる人かくら紙帳紙帳  
おひふとと紙帳紙帳紙帳紙帳

其角  
貞長  
野徑

帷子

かこひらの四五六月のまらみら  
帷子あはらるる日日出る那  
うとゆらや佐保と龍田の留北姫

宗鑑  
大草  
青峨

祇園會

祇園會の山路よ入るや大はなる  
ふらとや山ふ木はある祇園の會  
祇園會や林のまらく手向は  
ま白もとも踊るやまきまんの會

宗因  
梅盛  
如貞  
山嵐

氷室

水の奥氷室より川ぬる柳の那  
ちりほめて千年あねる氷室山  
ありくさや家ふ冷水氷りち

芭蕉  
負室  
溪石

雲の峰

湖や暑ををくひくものみ松  
雲の峰なんや嵐くくくとも  
夕ら終や元さくひく雲の嶺  
くもの峰室ふく後のりやはたぬ  
柴刈くくぬるくもあはまの峰  
雲の峰腰うけおるくく心な列

芭蕉  
鬼貫  
去来  
桐雨  
明水  
野馬

雨乞

雨乞小先まろくややまきかき  
あま乞く近江となりし川の敷

本草  
乙洲

昼寐

山人の昼寐を志く是葛かほら  
かきひくしの洗濯まろくむ寐うぬ  
まてくすお額あきゆる昼寐うぬ

挑妖  
昨非  
為御

土用

白雲の天は原草土用う那  
寒晒し土用の中吹はるりか奈

望一  
許六

虫

捨人や木草にかきて土用子  
ありかきた時代よ達や土用をし  
らほり香や虫子もせしむくその  
内張の浅はあきや土用母し  
虫けくやせめてもあは清えさる

其角  
杉風  
トク  
理性軒  
肅山

# 暑

あつき日瓜海ふ入りの最上川  
 焼豆腐うとくしてあつき夕日う船  
 葺の二多あふうらぬあつきう那  
 と死庭の砂あつうらぬうりう素  
 志終んこの藪ふく風そあつうりじ  
 かんところあつ暑うと石の壁をう  
 照射てあつりもあつう海のうへ  
 毒もありふもあつ宿のあつき我  
 及とらふ蚕下と臭のあつはうれ  
 元山はちうらあつらぬあつき我  
 粉かなれ蛇もよるの暑この素  
 馬の目はあつうらもあつ暑う船

芭蕉 宗因 去来 荷兮 野童 鬼貫 嵐雪 氷花 許六 穰雖 里東 牧童

あつ砂ふ雀足おくあつさこの那  
 田の草はたふあつをりてあつき我  
 蟬なうてう人駕もなれあつさうら  
 年とととと晩田の縮は暑うう那  
 並松をえうけて町のあつさか有  
 草の戸やあつとと月と取うとと  
 え葺の内乃あつさや棒はうい  
 積あけて暑うりやあつとととと  
 半日ハ朝寐ふあつととあつさか  
 空しうら水てあつうらあつはう那  
 村西の木城よとあつあつさうら  
 めあつき日も擬の木はまの夕日哉

遅望 之道 探志 溪石 卧高 我率 乙洲 卓袋 蓬船 行秀 其角 素堂

夕立

夕立の雲もかゝらんとするとの空  
ゆふぐちのまよこや何處よ下詠をうん  
白雨や障子かけぬれ片窓をさし  
ゆふぐちのちかどひのく月や松の上  
夕立の跡おりし路や堺うら  
ゆふぐち追らばとてくぬれや村ぐら  
ゆふぐちや鋒さきまゝは涙一守  
ゆふぐちや坂行駕けはとどろけ  
ふぬれさしぬれぬれぬれぬれぬれ  
夕立の原ふきぬれぬれ枯木うら

去未 鬼貫 嵐雪 夫州 其角 傘下 愚哉 隨友 仙化 山川 沾蓬 荆口

簞

竹婦人

ゆふぐちのちかどひのく月や松の上  
白雨のまよこはるれつ山お上  
夕立の跡おりて廻る山田かな  
ゆふぐちやとどろけぬれぬれぬれぬれ  
夕立や樽の臭のゆきまきり  
江山や沼津の屏風をうつし  
さゝぬみや近江おりてぬ 簞  
ゆふぐちらんも枕敷なりの竹婦人  
抱きかゝりてきりぬれぬれ

去未 鬼貫 嵐雪 夫州 其角 傘下 愚哉 隨友 仙化 山川 沾蓬 荆口  
吉羅 昌房 子祐 李下 以府 宗因 其角 卯七 其角

# 涼

破風くらみ日影やよりとれ夕涼  
 涼しきふ榎もかたね木蔭るな  
 ことごとしして涼しや宿の這入くら  
 夕涼夜風とまりにならふ涼なる  
 かけ涼し松原さして落日和  
 ちかぬ人と謡同答とみかろ  
 犬ふぬむや追ふ物のとみ我  
 としとさのかさまりを夜半け色  
 翠簾うけて誰妻なつて涼三舟  
 水と羽と合せて行勢や夕とみ  
 小屏風小山里さし腹の上  
 ちものとのくふ達より夕とみ

芭蕉  
 玄旨  
 荷兮  
 去来  
 宗因  
 鬼貫  
 嵐雪  
 負室  
 秋色  
 沾徳  
 丈草  
 如風

とらじさや檣の下ゆくあつめのと  
 涼しは波りされてめは川辺く船  
 桃燈のともやらゆしとみみあ  
 船涼三輪かまじと沖へゆく  
 管涼し檣よりのそと茶の白ひ  
 我舟と涼むさまなり涼し守り  
 洋や魂さうと川さうとみ  
 とらじさや帆又船既ちらじ髪  
 琴ひらいて老をかませよ夕す  
 平ぬかた合夜そ朝露夕とみ  
 とらじさやうらうらとゆきとあり  
 涼しはやうらうらとゆきとあり

俊似  
 未學  
 卜枝  
 枳風  
 巴山  
 卜と  
 柴帯  
 甚角  
 智月  
 支考  
 里東  
 句空



風薫

打水

このあつり二三食りしはすくさく  
きもさねお本絨さくさくや風の音  
かきしらるの脊中ふくはる湯みる那  
ころおくも尻吹くさるすくみる  
故面を出く窓一夜涼む戸に我  
さくさくや物らあ声さ瓜の小玉  
はく浪や風の薫りの相ささし  
目ふ耳ふあふく風はかをりぬ  
帆をかふる潮のはくさくや風薫る  
うら水ふのこたさくみや梅の中  
あう川やさくの垣穂ふ夏の月

野 山 衛 一 土 鉤 芭 鬼 甚 文 卓  
 川 門 葵 芳 壺 蕉 貫 角 草 袋

心太

菜瓜

沖鱈

心を紙置とやふらふら  
血鏝ふ駒のけあけやさうてん  
あ門のらちあ呼せんところん

宗 其 序  
 因 角 令

柳さくさく何と涼とらさ菜  
児のまね玉あもあゆるさ菜とさ  
白くてもあき味やまら瓜  
あうくしてさ菜もみえぬ暑哉  
茶けくつれまを洗くさ真菜瓜

芭 嵐 鬼 去 正  
 蕉 雪 貫 未 秀

酢徒利水さあやまちそ沖鱈  
沖鱈子れとりんてりさくさよ

ル 曉  
 董 臺

# 清

城めと市古井●清水まゝの洞人  
 抜とりさめり後清の片草鞋  
 手ぬぐひの手巾もあつたあつた  
 六玉川高野の外に清あつた  
 とみきりて塩子の沖に清水哉  
 帷子の湯釜をたいてゆくあつた  
 遠山をぬぐつとあつたあつた  
 連あつたあつたあつたあつた  
 松風よ雲のけしき清水の角  
 我跡く缺層イグチたちよる清あつた  
 山麓やあつたあつたあつた  
 海みとえてよとあつた清水あつた

芭蕉  
 嵐雪  
 宗因  
 去来  
 俊似  
 尚白  
 一髮  
 一文  
 一濁  
 許六  
 那七  
 嵐水

# 晒井

# 汗拭

旅人の足あとよる清あつた  
 あんまの跡う清水のあつた  
 此夏の縁はトしくあつた  
 落合とくまきあつた清あつた  
 はらし井や底うら寒い人の声  
 きりしめや涼世ハかゝる水あつた  
 さらし井や男あつたあつた  
 尋常の和巾ワキナあつた汗拭ひ  
 扇折アヒいうあつたあつたあつた  
 生の松マツあつたあつたあつた

仙化  
 其角  
 沾徒  
 蕪村  
 桐西  
 嵐雪  
 汗々  
 嵐雪  
 千那  
 其角

夏瘦

夏やせふ能因あつも小食より  
なり瘦と悪さる人と云く自とや  
ま門やせやと唐士の半妃より

其角  
夙子  
友辞

川狩

川狩やまのらし流より手柄より  
川よりやあとし木蔭お支涼之

我峯  
愚心

秋近

秋のいとよき月小秋近一故とんか  
飛かへはとんはのまも秋ちし

此筋  
凉爺

不二詣

あつ雪小思き善気流富士詣  
角帽より雪より調心やあし詣  
武士より川越より富士より

其角  
素堂  
予琴

法被

人並の端をも越より街被川  
夏よりよひ目の行方や流路島  
破と扇一皮より流と御被より南  
吹陣の合羽よりそよより川  
らよ母より豆腐よりまく川被川

宗因  
嵐雪  
未学  
其角  
琴風

卯

法被

卯の花より及摺寄しより川被山  
うはちより卯よりとまより鹿起成  
弁のころより隣ありやねれ嵐  
卯は花や雨のありは皆の跳  
うのころより卯のころより曇り  
卯は花のころより持たより毎の垣  
うのころより卯のころより窓明

去来  
枚風  
之道  
楚舟  
支考  
土芳  
野坡

若葉

しつと西ふはくくね柘植の若葉我  
ゆき一葉にしろ葉の云はれさるけ  
ひとしきれ葉もうらけくうそか那  
よあしとらんとて雲よれとあふらな  
おりのひこめてみるきむのさる葉我  
と若葉ふく風やふくことお刻よ  
非情あも毛泳き枇杷のさる葉我  
まうこころを我の身延のさる葉をんん  
きりの株のさる葉をんんれれ葉のさる  
若葉あうらとさる葉のさる葉木う那  
夕支ふらう葉のさる葉の若葉う那

素堂 其角 楚舟 定良 宗因 嵐雪 鬼貫 敬西 不交 藤蔭 荊口

若楓

僧心の青のさる葉をんんれれ葉のさる  
物食のさる葉をんんれれ葉のさる葉  
馬小葉のさる葉をんんれれ葉のさる葉  
さうのけなれ針事うらとさる葉をんん

其角 嵐竹 卓袋 兎筍

葉櫻

葉はうらとにふらう一や鞍のさる葉  
あふとらうり散のさる葉も桜う那  
こもさる葉やさる葉のさる葉をんん

鬼貫 沾荷 蝶羽

葉櫻

さうらとに実冷ふて暖れん若の山  
山櫻實のさる葉をんんれれ葉のさる葉

一鉄 取棠

茂里

嵐山藪の茂りや嵐おとち  
川草のふまさら白み茂りかな  
神くくと春日あけて清くらぬ  
あけさゆく草津の境や橋の晴  
光こゆふ二ツの山れあきり  
那花のあと今朝の旅ふとの茂り我

芭蕉  
嵐雪  
鬼貫  
宗因  
去来  
子珊

夏木左

よりの心推の木もあり夏木  
片そだの本社にうつらなる木  
鷺の羽は浅黄小吹くや夏木  
夏木とちとらつ木はくま猿の  
声の巢のあつきりのわたり夏木

芭蕉  
昌維  
希因  
安枝  
鬼貫

下園

須磨寺小頼ぬ笛きく木下園  
芳雨母木の下園は傘帳の糸  
下園や牛は御前を履へら

芭蕉  
嵐雪  
百里

青嵐

らき雲や左右小別とて青嵐  
麻呂巾吹落しきりまあふし  
色としもあうりろろあを嵐  
雨をねて松の白ひや青あふし  
梢めと破風の光りやあを嵐

史邦  
巴流  
嵐雪  
支流  
百里

常盤木

松風の落葉ふる水の音とどし  
夏こらふ常盤木あめつらも常盤木

芭蕉  
負室

桐の

かみまりのなつとて暑よりし桐の花  
桐の花青そらえせてそのひねり  
堀こしふ大工はつひやまりの花  
此うゑり降る南やまりの花を船  
茂る木の中ふからり桐の花

史邦  
猿雖  
因友  
子葉  
トシ

花  
袖

袖の花よ昔志のそん料理の写  
ゆはあや度へりくるついであり  
行あもりの白く袖とあるひとと  
袖つゑよ仇名あり酔ひうら

芭蕉  
彫棠  
言水  
佑徳

夏  
橋

蓋とねの蚊の花井戸や夏橋  
脱つめて見長はあがりるる柳

一麓  
涼盛

青  
梅

青梅や社のけう空そあはるはまうく  
まじりや乳母うま妻のあかくし  
あや梅やそとよりりれい寝履

岩泉  
幽光  
入松

標

標佩てつさとめうや志は者  
干物のあしうあつみやるる標  
うきまやあちのむよあまの声  
温飢打とまうりわりのあち我  
水まさのらもう標のそらよのほ

嵐雪  
白雪  
周友  
素覧  
平吉

栗  
花

世のくはつらけぬらねや朝の栗  
湖はなまきはちちや栗花をな

芭蕉  
鹿弾

合歡

象深や兩よ西越々移ふのを  
合歡の本はねらうてねるむ清き水

芭蕉  
仙花

覆盆子

枝枝や付るる一をりいちと  
手の跡を忘れず甲斐のつらと時  
鼻紙の覆盆子水滌るる露哉  
水うれば澁とりのまぐいらと角  
井の底は蛇を忘るへ一蔓のらと

重則  
陣由  
朱由  
杜由  
山川

古寺

古寺や傍らぬめりくと校摺のむ  
掃るるのくさい日和くまをうたふ

三園  
度江

柿の葉

此中の古木のつれかきのと那  
柿は花蟻のちくくをとう休る

此葉  
可廻

百日紅

さねうとも花ふはあうぬ百日紅  
ありふともや百日紅の散る日まそ

其角  
支考

燕

花子

杜若もこれみ祭句はかみあり  
そねはつと蛇のゆくやかまうら  
かとの水はみれふをくよ杜若  
獨りのみはつとせんかやのま  
植るるみりぬ研さきめ燕子花  
吾も句は下よかく形りうたうら

芭蕉  
本草  
嵐雪  
周也  
桃西  
成之

# 牡丹

寒うらぬまや牡丹のうねの蜜  
 土嘗くをふかむうぬ牡丹うな  
 我う身の細うるりやほえん畑  
 咲ふりあるんまきれ紅牡丹  
 蟻獨ちあつかりかく居るんうね  
 一先のほえん端々うなまう素  
 牡丹ふうんうるとよれ唐茶哉  
 頭判る袖とそらきりあまうな  
 鳥の起川牡丹のはなみひくを  
 誰宿そ穴明きまゆ紅あえん

芭蕉  
 嵐雪  
 鬼貫  
 一井  
 許六  
 路徒  
 挑隣  
 猿雖  
 瀟波  
 毛純

# 芍薬

芍薬も紅とりの紅とまをれり  
 寸陰もまひ芍薬の花えう那  
 才の穂や芍薬埋む里のせと

紫紅  
 有也  
 自笑

# 葵

刺さけの葵をまきむ烏帽子うね  
 野草あふたのそらう葵のうね  
 おも瘦てあひひつける髪うね  
 螢え一酒は夕影やああひ

魯丁  
 岩泉  
 荷兮  
 仙化

# 苔の花

軽け卵のまきむうねはく苔のま  
 うらせむ跡で咲きりあけの花

野坡  
 希因



# 芥子

白芥子や耐雨の花は咲けり人  
 給あせむさ人けりのひとこまる  
 恥ふの一下濱苗守と芥子の花  
 芥子散と直ふ実をみる夕う那  
 ちるさひみ見そ拾ひぬけりの花  
 人らると散るをそとわね芥子花を  
 咲らちやうらまほまきけりの白田哉  
 まさしくや馬蹴やまをゆるさの芥子  
 大粒る雨ふとく人けりのさう那  
 いくはとの世ふまわりのさう一のさ  
 京出さく泊りのよとや芥子花を那  
 青くまき白ひもゆじけり乃花

芭蕉 来山 去来 李桃 吉次 洋水 傘下 丈草 東巡 支考 里東 嵐藤

# あまみ

# 竹子

荊のさう裾まきくじかり旅とらも  
 なまけらまき名残らひもせとる荊  
 竹の子や雪隠おまて嘆哉の坊  
 筆やかり森の床はまのみよりも  
 多ま月の外は子うれし竹生時  
 子おはれてるままや去年の竹  
 垣根こし外の子取し鹿の那  
 竹の子や境目もあふと二あま生  
 とけの子はちうらを流またちあま  
 筍のちうらけきけりあまりか南  
 下りあま外の子盗むあまよりうれ

嵐雪 嵐藤 風 鹿貫 去来 丈草 全峯 智丹 凡兆 猿雖 玄梅

落

のりまうて落のきふりのおふくとも  
草外やふきのまのりの葛又のちと  
子小きやうとりの迹はあまきおたり

里東  
波村  
乙州

茄子

昔のまうこ青紫あうらやあまひ汁  
赤味ゆりあうねまきりな初茄子  
一本の茄子もあまき体とあひうり  
神鳴ふ茄子もひらうちけりあう

芭蕉  
北枝  
杏西  
園友

藜

瓦とりせん藜の杖よなる日まう  
元政の軒かとうらあさう一の南

芭蕉  
西雀

紅の巻

紅の巻も海のかさうや朝態ゆぬ  
きくおうねまこれうりやるふの巻

去来  
山店

夏

葉

蠅かうら一枝とらんがりのまう  
夏葉やあまひの巻の先へ嘆く  
あうりとも法師のこあう夏の葉  
なうまうやうねも西ああうまう

其角  
拙候  
をんる  
旭芳

撫子

あうらまや着法あうらあむらん  
撫子ふあんとてうりや川あうり  
なうら子のまうあう葉のまう

越人  
嵐蘭  
猿雖

# 百合

花をたれどかく浮世とくま百合  
姫ゆりやうくよりたりの協協の以空  
餘りのの箱ふさのうり百合のこお  
さみされふおおもたしゆりれもな  
草ゆりや百合と中く花の教

宗因  
素新  
嵐雪  
破笠  
半残

# 橋

後河路やう船橋も茶の白ひ  
ぬを降る橋てとらと船の起てりそ  
たちと船やあらしの橋とつたえくは  
橋やあらしふあらしゆきまの糞  
あけしのと橋くらし旅とくこ

芭蕉  
鬼貫  
木因  
桃隣  
我奉

# 登顔

ひるかちぬ米橋涼むあつまるり  
登教よひとあきまよ一後者の跡  
初る鳥や夏山伏の山峯はくこひ  
登る鳥やまもに川くあまをさけ  
枯柴よ登る月暑し一足のまめ  
ひるかちや口の暑れとも花はくり  
登る鳥よ無のこまやあまのゆと

芭蕉  
野坡  
交考  
桃隣  
斜嶺  
沽圃  
嵐蘭

# 藻の盆

藻のともねをかかする蜜の啓曼珠  
盆藻てる湖水あらしきるや夜の山  
潮引くく藻の盆あむ暑しの那  
藻はともねのとまきれくや泡の上

胡及  
秋風  
児竹  
桃隣

櫻  
麻

後ぬきて中やうらんはト麻  
行ぬけの家ありしや横ぬき  
三日月此らうちて居るはらう麻  
いふ事してはらふうらん横ぬき  
誰ふけは斬るらんさうら麻

音亞  
一矣  
嵐竹  
杜格  
普人

紫  
陽

紫陽花やかさむう時の流流  
あつさるゝ五器よりうや竹松  
紫陽花やうの目く入りの山はら  
あつさるゝあつさるゝ安き扉う有  
常くえよ各もあつさるゝの巻は  
紫陽花や西のらあつさるゝ空のえ

芭蕉  
嵐雪  
梅扇  
伯之  
為松  
希因

萱  
草

せめてきて人のきふあつさるれ  
住ハ誰の家よ花きくや高き草

来山  
燈外

あ  
免  
や

あつさるゝまきと情や五天のあやめさ  
あつさるゝの端もあやえあつさるけり  
あつさるゝ尾の長をくふあやめさ  
あつさるゝ葉の根を根をくふあつさるさ  
あつさるゝの軒ま入るあつさるけり  
五日あつさるゝあつさるゝあやめさ  
馬あつさるゝ侍きつはしあつさるあやめ  
にだれのあつさるゝあつさるゝ直りさる

芭蕉  
鬼貫  
嵐雪  
如泉  
荷兮  
柁隣  
仙化  
子珊

# 顔

夕うほや秋の夕うくの飄一の南  
ゆうほたるさちまの皮は鹿目我  
夕顔や名をおとくするむの形  
ゆうほの志をむん人の志をぬく  
夕白や香かく中とのまつくあも  
山崎まて夕うほえくる世中う那  
夕うほや一挺のこほ夏豆腐  
ゆうほや白のこまとも船の中と  
夕うほの造せ所ふさまりより  
ゆうほはれおんのかんや油賣  
夕顔やあつりとるねん炭より

芭蕉 宗因 去来 野水 大町 市柳 許六 甚角 堤亭 詩六 杉風

# 藻

藻の寒もらききよくあうあや  
鯉とんで藻のちねらせふさり  
うきうきや藻まうと川ぶくみ  
花咲く程うきまきの藻みうく  
泥亀やゑらきくはのまをうあ

嵐雪 つゆ女 紫雲 知足 蝶羽

# 河骨

河骨やほふひくうね花はうと  
川も移や梅も爛れは夜半 楽  
かたはねの二本こくも西の中

素堂 嵐雪 蕪村

# 蓴菜

蓴菜の名は人めくもあられあり  
蓴菜の味あるうへに敏ある水とあり

万子 太抵

# 蓮

さうくいと蓮らうとらけの亀  
 浦舟の頭をくし句ふららさうを  
 痛てうと人蓮ふ誘ふ朝海らけ  
 むく起ややむくくる蓮散ららと  
 蓮の蕊らるや八島のこころれは  
 客あつて昔ふ蓮の地追り人  
 らとの香や田の仕方する水の跡  
 蓮ふん日ふ月代をくはくととも  
 鮎のふて蓮ふららふことねくは  
 咲散りてふのう人けをららとかふ  
 笑をまてみなく蓮ふさふふ虎

鬼貫  
 本草  
 其角  
 玄梅  
 史邦  
 良品  
 沾徳  
 晨風  
 自悦  
 正秀  
 古梵

# 蓮葉

涼葉中葉葉此蓮の風情さうふん  
 らとのまやふらりとさきふとまれ

素堂  
 白雪

# 沢深

沢深のほとりさきさるあめさうね  
 中葉葉ふちむら細く笑ふさうり  
 おもふらや千任の片端え知こし

嵐雪  
 鬼貫  
 朝叟

# 菊の花

わのち移ふとくさの濁りうね  
 蘭は花や涙ふよとあつ霄の西

此筋  
 鈍可

# 蓮葉列

鴨の子や袋あふ入まてまらも列  
 さうくおくけさささ池列まとも

且菜  
 邑姿

夏三十七

名  
仲

林  
檜

善作の角のやうな形のえん  
昼鐘や善作そよく山はとひ  
下えふとさうまき外のもよおふ  
善作や西追ふ風はそとむら  
この外や水の中でのそとまき  
この竹のふ日あうらうら  
善作のうらぬみまき  
このくけぬ涼しき声や七ッ  
さふとふもアんとおもふし  
ゆりしきも知ぬあきき

宗因  
夫草  
仙花  
路徑  
和泉  
百里  
龜洞  
車未  
其角  
百里

